

自昭和十六年九月九日  
至昭和十四年七月十日

申支方面ニ於テ

# 行動概要

要

步兵第三十九旅團

昭和十六年九月九日

1778

本作業ハ猶推稿ノ餘地  
取敢ハス参考ノタメ配布ス

昭和十四年十月一日

聯隊長

アルモ

1779

正官候補送別

第一 動員ト出征

同日歸途昭和十二年九月九日夜、事変勃発以來雄心勃勃腕ヲ折シテ機ヲ

待テアリレ我カ第九師団ニ動員令ハ下達セラレタリ

聯隊長ハ直チニ准士官以上ヲ將校集會所ニ集メテ戰時命課ヲ爲シ

タル後

本職此ノ度大命ヲ拜シ諸官ト共ニ光輝アル軍旗ノ下ニ奉公ノ

誠ヲ致シ得ハ誠ニ欣快トスル所ナリ諸官ハ粉骨碎身此ノ重大使命

ノ達成ニ遺憾ナキヲ期スヘシ

訓示ヲ爲セハ將兵ノ志氣愈々揚リ夫々勇躍職務ニ就ケリ

爾後動員業務ハ極メ円滑ニ進捗シ九月十九日予定ノ如ク動員

ヲ完結ス

其後間九月十八日ハ畏クモ待從武官ノ御差遣アリ且ツ

天皇陛下ニ於ケラレテハ第九師団事変地出動ニ就キ其動員狀況

視察爲特ニ待從武官ヲ差遣ハサレ尚師団長以下將兵一同益々

我カ威武ヲ宣揚スル上ニ異ナル氣候風土ニ自愛シ其重責ヲ完ス

ル様申傳日トノ優達ナル 御言葉ヲ賜ハリ將兵一同齋トシ

鳴恩之感深シ必勝ヲ期ス

九月二十日午後二時五分營門ヲ出發 我カ歩兵第三十六聯隊ノ精銳

曰露戰多ク以未武勳赫々ニ我軍旗ヲ奉テ歩武堂ニ暴支痛懲ノ征途

ニ就リ

沿道烈度漲ル熱誠ニ官民<sup>官民</sup>歡呼ノ聲ヲ送ラテ二十日大阪ニ到着

乘船ヲ準備シテ大日能代丸以下六隻、運送船ニ分乘シ盛大ニ國民歡送禮

儀ニ奉答シ一同ニ祝國ヲ心誓ヒテ勇躍出帆ス

海中央棧ニ于九日早朝六早ヲモ敵地ニ吳淞沖ニ進出ス

帝國艦隊精銳ニ威風堂々御志花江上ヲ制シ、遙カ開化ノ虫黒煙

ヲ噴キ其ノ聲遠雷ノ如ク將兵一同血湧肉沸ニ躍リ思ハ快哉ヲ

叫ビ

手場ノ状況ニ對シテ演言背語配布



三 上海附近ノ會戰

1) 九月三十日聯隊は吳淞中より回航し、主力を以て虬馬頭一部を以て上海馬頭より上陸す。武勳輝く我等が三六の軍旗は再び南北の野に靡る。遙かに江湾鎮の方に殷々たる砲聲を聞き將兵存しく抱腕す。

十月一日早朝聯隊は虬口露營地を出發し吳松  
以上を以て過越すし曰吳松家附近に到着師團豫備隊とす

爾後聯隊は師團主力の後方に在り逐次躍進し、  
第一線に在り道路神修等に任しありしが三日夜步兵第十八旅  
協力團長の隸下に復し翌四日拂曉右翼六隊左第一線とし  
て新木橋附近の敵陣地攻畧を命ぜらる。  
咬龍終に雲を得たり進撃手の命今受けて將兵

の志氣心に秋天に冲す

翌四日拂曉聯隊は右より第三第一大隊を第一線に  
朝霞を衝いて新宅南端より猛然攻撃を開始す

左第一線第一大隊方面は戦況有利に遂に午前

七時三十分僥家宅西北部無名部洛を完全にと領す

一方右第一線第三大隊は北梅宅より新木橋に亘る

東面陣地よりする猛烈なる側斜射に依り死傷續

々として攻撃精神益々旺盛にクリーク地帯を突破し

七時三十分東部新木橋の一角を奪取す時に敵火益々

猛烈にして前進困難となれるを以て工事を進進

迫中夜に入りたり当時正面の敵は濃密な鐵道によ

る退路を掩護する為新木橋一帯の陣地には数

線の鉄條網を有し其の第一線の重火器は中強度

の掩蓋を有し又クリーク部洛等を巧に利用し相当

堅固に設備す又其の抵抗も極めて頑強にして奪

1783



水寨工

築立

協力

工大隊長  
新井 傷

の攻撃手意の妙ならず戦局將に交紛に至らんとする  
此の時に當り十月十八日夕聯隊は新に師團の中  
央隊を命ぜられ勇躍前進し直ちに談家頭陣  
地に對する攻撃手を準備す

二十日午前九時朝來の濃雲初漸く晴れて旭  
光露麗なり午前九時十五分重砲續いて山砲は  
談家頭を敵陣地に對し突撃し又援射車を開  
槍す彈着極めて正確にして爆煙敵陣地を  
覆ひ砲聲耳般々たり

午前九時三十分砲兵射程延伸の柳柵散彈射  
撃に膚肉持して第一線たる第一中隊は決然突  
撃手前進し談家頭北側一軒家を占領せしが歩兵  
七聯隊等三大隊正面三軒家及談家頭西方約三  
〇〇米赤屋根及其東側雜木林より側防火  
熾烈にして終敵前七〇米に停止の已むなきに至れり

1785 7

聯隊長は直ちに此の原因を排除せんと快意し  
 拙力重絶兵を以て赤屋根の側防火器を又配属  
 せし拙力の山砲火力を以て原田村南方三軒家の  
 敵側防火器制圧一部を以て談家頭陣地を制圧す  
 我が砲兵の弾着極めて良好にして側防火器に  
 沈黙す右第一線第一中隊は中隊長山岸大尉指  
 揮の下に猛然突撃すと再開し敵の交通壕を  
 利用し西北部談家頭を側北より席巻し  
 次で西南部談家頭を奪取す  
 又殘部大尉の指揮する第二中隊は之に連撃す  
 し右翼より戦果を擴張し午後一時五十分  
 談家頭を占領し完全な談家頭一帯の陣地を連  
 破す聯隊長は直ちに第二大隊を右に増かし猛  
 烈な執拗なる敵の逆襲を連破しつゝ快河の勢を以て  
 戦果を擴張し二十三日師団が平野に

1786

山中隊長 軍所命線なる郁公由南側様下迄の線に  
 本田大尉 進出し敵に多大の損害を與ふると共に稍ともす  
 副官 此の間に聯隊の損害は戦死大尉本田即平以下  
 二百三十一名戦傷少佐野村條吉以下四六の者なり  
 向井大尉 (3) 翌二十四日聯隊は走馬塘クリクリ北岸の敵を  
 山中隊長合理 束金々に駆逐し第二第三大隊を第一線に同クリ  
 一ノク南岸の敵に對し攻勢を準備す  
 二十五日二十時先づ左第一線たる第三大隊の  
 左肩掩護鏡 第十一中隊(新展)は大隊主力の掩護の下に地形  
 創微信 を利用して巧に接近し一與手に走馬塘クリ  
 斗を交へつ終に陣地の一部を占領し主力の転  
 進を掩護す續いて七時兩第一線大隊は朝

17879

行陣書

軍書

木中島

更傷

水塞二

水塞五

橋

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

中隊

職務を、利用し、猛烈に攻め、初め、熾烈に、敵の十

字火を冒して、復た攻勢を、敢行し、對少岸、堅陣

を突破、破竹、の勢を以て、戦果を擴張し、二十七日

には、木子寺、桐陸、家、密の敵陣、地を、突破し、梅園

及袁家橋、率、端に進出、す、翌二十七日、早朝、洛陽

橋及陳家宅、附近の敵陣、地を、突破、早くも午前

九時、三十八、日、危、憚、線に達し、南北の敵の退路に

大なる、カ、脅威を、與へ、以て、敵軍、總退却の、原因

を、與へ、たり

此の、向、聯隊の、損害は、戦死、大尉、磯部、明、田、力

以下、一、四、九、名、負傷、大尉、安、保、善、治、以下、五

二、五、名、なり

(4) 聯隊は、更に、突進を、続け、け、二十、八、日、正、午、北、新、涇

鎮、西北、蘇、州、河、畔に、進、出、し、同、河、左、岸、の、敵

を、完、全、に、殲、滅、し、羽、立、二、十、九、日、新、上、師、団、の、右、羽、翼

1788

隊となり、石橋西浜宅除宅及子血家宅間に転進  
集結し、蘇州河の渡河攻襲を準備す  
十月三十日、聯隊は新に井出少將の部下に復歸  
し、其の指揮に北指道すの下の密に渡河作業  
隊及砲兵隊に連絡し、着々攻襲手を準備す  
当面の敵は亦十九路軍にし、奉山所要所  
にト―チ力を設け、其の間に輕掩蓋及交通壕を  
以て連収水際近くに近く水面を掃射し得るや、  
掩蓋銃座を設備し、極めて堅固に陣地を占領し、尚  
一部に於て土民を使用し、増強中なるを認む、其の  
主力は河沿岸に直接配備せるもの、第十九路軍の精  
銳にして、一〇〇名を下らざる、先年上海事変に於て  
撃破したる敵と再び此處に相見へたるなり、將兵の  
志氣大いに振ふ

西方には東沙錢家街及江橋鎮に亘り南北に

1789 //



BA3 x 3 x 4 = 36 H=4  
 15H 5 x 4 = 20  
 12H 3 x 4 = 12  
 24H 1 x 4 = 4  
 12H 1 x 8 = 8  
 計 88m

連の堅固なる陣地あり敵は砲兵並機関銃を以て  
 蘇州河北岸地帯を猛烈に側射す  
 翌一日暗雲低迷し豫め核定しありし友軍飛行機  
 の爆撃終に中止の已なきに至れり加ふるに東沙方  
 向よりする砲撃手及機関銃の側斜射益々熾烈なり  
 聯隊本部は天明迄に西渡宅に移動し聯隊長は  
 早朝危険を冒し自ら第三大隊本部に到り敵情  
 河川の状況を偵察すると共に正午の強行渡河後撃手  
 に付き更に細部を指道すをなしたる後聯隊副官以下  
 を帶同し西渡宅南方約五〇米の堆土に位置し核  
 力砲兵観測所と密に連絡し戦斗指導に任す  
 旅團副官中川少佐又小西參謀と共に危険を冒し  
 該地に進出し密に司令部と連絡し聯隊戦斗  
 を指道す右聯隊に協力す砲兵は午前八時  
 核定に基き山砲三々大隊十五榴五中隊十二榴三

1790 12

中隊及千廿四榴一中隊は一着に攻撃す準備射撃手  
の火蓋を切る砲聲般々連轉き大地を震辰し大小の爆煙  
は間断なく渡河矣附近全陣地に林立し閃々たる  
火光は雨箱雲の如し

敵火は勿心ち沈黙す午前十一時四十分引續き突  
撃支援射撃手に移る全砲火は渡河矣河岸陣  
地に集中し爆煙水煙は勿心ち敵陣地を覆ふ  
配屬山砲兵第七中隊の一門竝に聯隊砲大隊砲は北  
岸丘阜上に陣地を以領し且接照準に依り對  
岸七十米の掩蔽處を逐次に撲滅す

正午砲兵の射程延伸に慮層接し第一大隊より出た  
る折疊舟搬送兵は東沙錢家街方向よりする猛  
烈なる側射を冒し蒙るたる煙幕の中を折疊舟  
肩に一着に突進を開始す我が砲撃により全く沈  
黙しありし南岸の敵は俄然猛射を開始せしを物

BA 推進砲  
少隊長  
從軍記者  
受傷

彈塔  
以テ  
一着  
指  
隊

1791

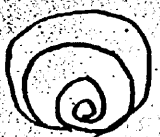
備す。満るの矢の如く突進の機を待ちありし。第一三  
 大隊は右より第一中隊第九中隊を第一線とし  
 一着に乗船するや工兵隊は直ちに段々を掘り  
 石部崩れ下る煙幕の下に勇猛沈着陣雨を冒し一着満漕渡  
 迎鏡創に移り南岸に達す  
 歩兵は直ちに各舟隊隊員準備せる竹梯子を以て  
 約三米の人工断崖を登り手榴弾を投擲する敵  
 と對し一與手に白兵を振て突入し壯烈なる白兵  
 戦の後午後零時十分終に南岸に據り大を占領  
 工兵隊員す尔の竹第一線は順環漕渡に依り逐次戦斗加入し  
 南岸大尉戰果を擴張し零時三十分渡河を完了す  
 中隊長  
 副中隊長  
 大隊長清水少佐  
 第一中隊隊長坂大尉  
 大隊副官  
 宮内少尉は刀負傷したるも尚ほ指揮を續行し南  
 戦力斗頑強に家屋に據り抵抗する敵を掃討す

山崎軍曹

午後一時四十分張家宅を占領す南端に進出後  
 機関銃中隊長山崎大尉大隊を指揮し歩兵  
 第十九聯隊第三大隊の張家宅西端南端進出  
 に伴ひ該地を之に譲り東部南端に進出し茨系  
 家宅及西方陣地に對し攻撃手を續行し又第一  
 大隊は第三大隊渡河後引續き渡河し新  
 第一線とすり第三大隊の左側に戦果を擴張  
 して以て敵が上海市防禦の鉄壁と頼む蘇州  
 河の堅陣を完全な裏に直撃す南端に大威力  
 威を與へ次いで該方面の敵が兵力を集中し我が  
 半渡に乗ると猛烈なる逆龍衣を企圖するや八  
 午有る余の優勢なる敵に對し敢然攻撃手を斷行し  
 冷雨西非々たる中を泥濘彈雨を日同じ水深胸を渡  
 するクリークを涉り全身泥土にまみれ飢餓を物とも  
 せず肉弾又肉弾猛攻を續け逐次戦果を擴

15

1793



大木之針  
水野之針

張して蔡家宅狄巷土八字橋及施家街を占領更  
に敗退する敵を急追し一與手に虹橋飛行場を占  
領し以て第九師團主力の渡河を確毎兵に掩護  
し以て尔后の攻勢を容易ならしむると共に杭州  
湾より突進中の第十軍一の進出を容易なら  
しめ次で該軍一の進出と相俟つて敵をして南市  
放棄退却の余儀なきに至らしめたり  
此の間に於ける聯隊の損害は戦死大尉山岸仁  
以下二三。名。員傷少佐清水圓以下五一九名有り  
上梅附近會戦の聯隊の損害は

戦死 大尉 本田治郎 以下 六九五名  
員傷 少佐 清水圓 以下 一七八四名  
計 二四八名有り

1794 16

四南京附近、會戰

聯隊は十月十日、第九師團右追撃隊の主力となり高家  
灣を出發、連日の冷雨、甲も泥濘、踏破し、高家灣、黃  
渡鎮、太倉、周壁鎮、崑山道も急追するに不幸敵と戦  
斗を交するに至り、崑山附近の敵に對し、則ち脅威を與  
へ得たり

聯隊は十七日更に師團本隊となり、崑山を出發、十九日、蘇州に  
進出、此處に於て第九師團追撃隊の主力となり、十月二十日

午後一時蘇州を公發し、陰雨の中、秋道線路に沿ひ

無錫に急進し、途中望亭、及太倉、土附近に相當堅固に陸

軍刀隊、地を占領し、敵に對し、彈雨を流瀉し、冒し、猛攻を破り、更に敵

を急追し、二十三日午後四時三十分無錫南門を占領し、城内

を完全に掃蕩す

續いて連日諸障碍を排除し、又殘敵を掃蕩し、常州、金壇

天王寺と糧食、秋之累加する勞苦、其氣を完服し、一路

戰隊復讐、兵隊入理

1795 17

南京に向い夏馬進し早くも十二月五日午後三時橋北頭東  
 側を南北に流れる丘陵線上に堅固に陣地を占領せる敵前に  
 達す此の陣地は南京東方大葉山山系に連なる南京要隘  
 本所禦線の一部にして三線より為す「ト」字の陣地線と見  
 とし其の間を掩蓋も有する野戦陣地を以て連綿し陣地前  
 には三線の屋根型鉄條網を張り圍らし又一連の鉄條車塚を  
 有し極めて堅固なり  
 聯隊長は前兵長たる伊藤少佐に報告せしむ自ら偵察に  
 依り陣地は極めて堅固なるも既兵少しと判断し新に山崎  
 大尉を指揮する清水大隊を伊藤大隊と共に展開し一擧に之  
 を突破し南京に突進せんと企図せるも接敵と共に敵火益々  
 猛烈となり其の第一線は一部を突破せるも死傷續出し終に  
 前進困難となりたるを以て同一地に位置する旅團長の勅諭可  
 も得て尔後逐次攻撃陣地を推進し六日薄暮終に第一  
 線陣地を占領す

1796 18

水工  
協力  
途中等  
協力

佐藤大尉  
自記

聯隊長は直了に檜皮大隊を清水大隊の右に増加戦果を獲  
張一更に第二線陣地に對し突撃準備陣地を難達す此間敵  
は續々兵力を増加し抵抗益々頑強なり第一線將兵は携帶  
口糧疾に盡き果て豫備隊より前送する僅少なを握り飯と  
芋とに依り饑餓を凌ぎつ、肌を刺す師走の寒風も物かは  
不眠不休掘進作業を續行す

(8日) 師團主力も追及し追撃隊は新に九習考隊となり (8日) 朝

より師團砲兵の主力を以て協力せらるることになりて聯隊  
長は旅團長の企圖に鑑み八日午後二時を期し總攻撃敢  
行を決意し着々準備する所あり

翌八日早朝聯隊長は副官以下を帶同し追撃砲を集中せし  
冒し大平橋東側高地に進出戦況を目視しつ、協力砲兵觀測  
所と密接に連絡し戦いを指揮す、旅團長自ら副官又連  
絡の爲到れる松澤參謀を帶同し大平橋西南側高地同線  
上に進出し聯隊の戦いを指導す

1797



八日午後一時五十分豫定ノ如ク配屬協カ山砲兵は一齊に火蓋  
と切り銃砲声殷々として耳を聳ふるはかりなり。吾陣着  
け極多て正確なり。

午後二時稍前友軍飛行機淳化鎮部路の爆撃を開始す  
るや轟々たる爆音に天地は鳴動し砲煙は敵陣地を西復ひ敵の  
射撃は次第に衰微す。午後二時砲兵の射程延伸し發煙彈  
射撃に當接して檜皮部隊先づ猛烈突撃を發起す。是に  
遲く清水部隊も輕裝甲車を突入に連撃し敢然突入  
し伊藤部隊の一部又之に續き手榴彈を乱投す。敵に白兵を  
振ひ内迫し壯烈なる白兵戦も交へ終に午後二時三十分之を占  
領す。檜皮清水兩部隊は機を失せず敗退す。敵に尾接急追  
し之を友軍砲兵阻止彈幕に圧倒殲滅し午後二時五十分淳  
化鎮西端に進出す。

聯隊長は血戦三日の猛攻に部下の死傷多く疲勞困憊其の  
極に達するにも拘らず新平清水檜皮兩大隊に現態勢

1798 20

を以て先づ上方鎮に向い戦場追撃を命じ、左第一線と敵  
に突入し、續いて前進せる第一大隊を掌握し直ちに本道上を  
果敢なる縦隊追撃に移り旅團司令部も之に續行し  
敵を以て後方陣地に據り、餘祐を以て午後四時早も  
淳化鎮西方約四村の高管頭に進出す

此の時前面山下村西方高地に「セッコ」五六を有する敵約三  
百は掩蓋陣地に據り本道兩側地區を猛射す之が檜皮清  
水兩部隊の一部は射撃を開始し主力又攻墓を準備中なり  
聯隊長は第一線の報告を受くるや自らも此の状況を視察し  
此の陣地正面たる本道方面より力攻するは徒らに損害多し  
時日と要す」と判断し伊藤大隊長に命じ第一中隊を以て

高管頭の本道を扼守せしめ檜皮清水兩大隊に本道南方  
地區を迂回轉進し上方鎮に向い追撃を命じ之が實施中  
午後五時頃突如戦車三輛を有する約三百の敵は本道に  
沿い地區より逆襲し來る聯隊長は直ちに第一大隊を以て

1799

機関銃大隊に命し之を攻撃せしむ敵歩兵は我猛射に  
 依り北側山地に向ひ潰走し  
 敵戦車は尚も後方に突入し後續部隊に相等の損害を  
 与へたるも旅團司令部附近に在りし山砲の適切なる射撃に依り  
 撃退せらるる聯隊長は第五大隊に命し第一第四中隊を以て本  
 道を扼せしめ自ら旅團長に戦況を報告ししむると共に旅  
 團長の企圖を承知し余餘の部隊は旅團司令部と共に高  
 嶺頭を待機し轉進せしむる隊の成果を待たず後八時頃約二百  
 の敵は本道南側より第一第四中隊正面に逆襲し來るも第  
 四中隊は独立機関銃大隊と共に勇戦終に之を撃退す  
 尔後敵は高陣地に據り乱射を續けありしが八時頃  
 より銃聲漸次減少せしむるに旅團副官よりも注意を受  
 け寺田大橋將校乍候を派遣搜索の結果敵は退却し判  
 断し旅團長は直ちに意思一致し直ちに第一大隊主力を以て前  
 兵し果敢なる夜間追索に移る旅團司令部も又續行す

1800 dd

時に午後十一時三分より之より先轉進せる清水大隊は上方  
 鎮に進出し待機中の敵を連破し自動貨車一輛及糧食を  
 鹵獲し該地を占領し以て山下村方向の敵の退路を遮断す  
 槍攻部隊の尖兵中隊たる第七中隊も又續いて上方鎮に向い果  
 進し遂に該地南方約半米本道三叉路に於て高池岩頭方向  
 より反轉し来るサイドカキを要害し待機一兵一を倒し之を樹  
 獲す第七中隊は更に上方鎮に進行し既に該地に進出せる  
 山崎大隊の區處に依り上方鎮の南側及び西側に陣地を  
 占領し警戒に任ず  
 此の時先に高岩頭に突入し米小敵戦車三輛は車輪々と本道上  
 を反轉し来る即ち第七中隊及清水大隊の一部は夜暗を利  
 用し好機に乗し内迫攻撃を敢行して乗員を刺殺し且つ二  
 台を鹵獲更に續いて自動貨車一輛を奪取す此頃  
 山下村方向より三々伍々上方鎮部落に向い退却し米小  
 敵は該地を占領せる清水部隊を友軍と誤り接近すると將兵不

山崎大隊  
 之傷

意に襲ひ或は刺殺し或は斬殺し約八十名を倒し山下村の敵を殲滅す

聯隊主力が上方鎮に進出するや路上に巨體を横たふ敵戦車を  
を見将兵思はず快哉を叫ぶ地に於て聯隊長は直ちに清水  
大隊を本隊に編入し其の兵力約三百は上方鎮一光軍門道を  
只一節に南京城に向ひ突進し旅團司令部は聯隊本部に續行す  
時に空は漆を流したる如く南京方面に突々たる火煙を望む  
待望の南河津橋の間に在りし聯隊の志氣大に振ふ途中敵  
兵三々伍々列中に反軍と誤り混入し來ると兵は之を不意に刺殺  
し前進す彼我混交し眞に平行追撃の狀態なり  
火兵中隊(高橋)に連するや一部は敵は抵抗を試みたるも不意  
に白兵も振ひ如く時力如く一歩に一人敵に追撃を續行す此道  
の家屋には林火赫々と燃え滅す此處彼處火災も起り支那  
兵の固執を頗る跡歴然たる高橋に連する頃支那軍は營の  
方に當り盛なるが音起り非常呼集なる

1802 水

旅團司令部は九第一線たる赤松第十九聯隊主力の関係上、  
 護橋に停止す。聯隊は遠く無二爲進し、敵は松尾谷に  
 退き、一挙に此の部路を突破突進し、敵の抵抗を殆ど受  
 けず、事なき。九日午前五時十五分、松尾谷に達す。赤松に  
 黒く響き、見える大南京城壁を仰ぎ、將兵一同血湧肉躍  
 る。此の城道路一側の街燈は一有に点火し、城壁上より燈  
 に照明彈を發し、同時に熾烈なる一有射撃を爲す。聯隊長は  
 直に伊藤大隊を本道北側に展開し、聖地力敵情地取を偵  
 察せしめ、清水大隊の主力及山下村南方に一時集結し、態勢  
 を整へたるや、達水て追及せし。橋皮部隊も所定學校に集結  
 す。時に天明となり、城壁上より力射撃は益々烈し、後方七甕  
 橋部路にも銃聲賑々し。

聯隊長は危険を冒し、防空學校東北角の望樓に進出し、副官  
 以下と共に自ら光華門の状況を偵察し、旅團副官中川少佐  
 も亦輕裝甲車に依り危険を冒し、敵中を突破し、防空學校

1803 46



為効果少く午後八時更に響き、爆破の音は完全な響き、  
 主開設すに到り、再び敵に横撃す。此の間南花台方向より、敵の砲臺盛んに、馬力花傷多し。物  
 多し石矛線伊藤大隊は工兵の作業を支援し、且光華門に對す  
 る突撃を準備し、夜を徹し、又九隊一隊は、敵の通河に對す  
 る突撃を準備し、豫備隊は清水大隊は大隊長沢西村少尉が指  
 揮する下に所定位置に對し、警備す。午後一時頃、上防壁  
 燬れ、西端附近の無名部落に敵兵蹟の集結し、其數四百五十人  
 達す。自軍も、清水大隊は急襲の果中、對基に集り、之は多大  
 の損害を、身へ西方に退却す。午後十時頃、約二百名の敵は協和橋又  
 之に近行し、鉄橋に對し、夜襲し、然るも、以て九隊一隊は、三隊は、  
 之を猛射し、交戦約十分は、之を西南方に退却す。本夕以降  
 特に各方面より、迫進せし、光華門に入らんとす。敗殘兵聯隊と旅  
 團司令部の間、に光華門來、二十日敵は、續以兵力と光華門附近  
 に集中し、敵の銃砲火益々熾烈にして、又背後方面、南花台方向に

1805 27



紫金山方向より射撃の集り、射撃に人馬の死傷續出す  
 在七寶橋旅團司令部と聯隊との間に残存陣地並に充滿す敵  
 残兵の爲に命令受領者土田軍曹戦死し通信兵も戦死し或は負  
 傷し爲に中川副官連絡以來僅かに無線電信を以て連絡す状態  
 あり(山)午前八時頃旅團副官武田大尉は旅團長の命に依  
 り山砲彈藥五百及機關銃彈藥補給と兼和輕裝甲車に乗  
 中間の敵陣地を突破し聯隊本部に到着旅團長の意旨を傳  
 へ聯隊長を補佐し且つ十時聯隊通信班の決死の作業に依  
 り三回線路に連絡に成功せしを以て午後電話に依り密に旅  
 團司令部と連絡す當時敵は城壁上に射撃中砲を配置し在り  
 爲に旅團副官武田大尉と送り、裝甲車は所管直中核門前に出づる  
 直に射撃を受け破壊し搭乗車員戦死す聯隊長は山砲彈藥を  
 補充せしむるを以て午後三時再び既舊山砲を城門破壊射撃を命し  
 且第一大隊に其力成米を得午後五時三十分期に突入り一人命  
 七時後山砲觀測所は在り、射撃其大隊長於不副官と共に戦

1806 28

斗指揮に任す午後三時山砲二門は道兵照準に依り鉤銃打  
 破壊射撃を開始す此は城内上部迄に土嚢は漸次崩れ落りて急峻  
 なる斜坡を形成し午後五時稍前辛うして奥裏路を開闢す  
 此の時敵の重迫撃砲彈十數發は觀測所附近に集中し轟々  
 爆音に屋根は崩れ耳は聾し烈き閃光に目を眩し蒙々たる砲煙に味  
 吸ふ困難となり一時戦指揮も砲臺も絶つ砲煙漸し散れ城内の方  
 を見れば伊藤大隊の一部は既に城内に突入し斜坡上に打振る目撃す積  
 嗣敵將兵思はず方城を叫ぶ時に午後五時なり  
 之即ち敵の砲臺が我戦司令部に集中したる好機に乗し独断中  
 藤少佐が突入を命ずる也敢然山際少尉が率り第一中隊突進を  
 發起す此は葛野中尉第四中隊之に續き一帯に城門内に突入し之を  
 占領したるなり

戦況益々悲惨なるも將兵の志氣旺盛なり聯隊長は直ちに「伊藤大  
 隊は全滅を賭して光華門を確保す」との密命を令し下達す伊藤  
 少佐は薄暮を利用し猛烈なる決意を以て豫備隊を率り中隊を率り

1807 29

城内に前進し城内より射撃機関銃の縦射と城門上より射撃する榴弾  
の投下に依り戦死傷續出する極めて困難なり。戦況中に在り沈着  
剛膽部下を激勵指揮中午後九時終に敵手榴弾の為右額部に  
受傷し城内確保を命じつ、壯烈なる最後を遂ぐ  
その後城門内の將兵は大隊長の遺命を遵守し一襲の砲及木材の  
流小落り生じたる内斜面に三放の掩体と設け死傷の續出するを  
物としせず該地を確保す午後一時半頃約百名の敵兵は工兵要材  
を向より第一大隊の背後に向ひ夜襲し來りしも當時原所屬に  
復歸する竹川中尉は部下中隊及第一機関銃を指揮し善戦之  
を要し且一部を以て老華門内に突進増援せしめ午後遂次兵力を  
城内に補充す。其に城門外第一大隊各中隊は隊兵力を統一指揮し  
該地を確保す十日又十一時頃敵は催涙瓦斯と城門内に投し又  
戦車一輛を以て前後數回に亘り至近距離に肉薄し城内を猛射し  
又午前一時頃より城門上より材木を投下し之に石油を注ぎ火を放  
終夜焰を以て我兵を苦しめたりも守兵は克く之に耐へ老華門を

1808 30

確保す

此の間聯隊本部は城壁直下の防空壕校舎内に在り行下り城  
烈なる敵火の下に之を徹し戦士指揮す其以後方より下り座敷  
の神給意力如きを以て豫備隊の陣樂を兼め集集に補充す  
本部は高橋を以て楯版を作り前進す

夕刻野島重砲兵大隊及世野武重砲兵中隊は旅団に協力を爲す  
り小飛行場附近に陣地を占領すや旅団長は直に之と連絡し且聯  
隊隊長の意見に徴し翌十一日の戰鬥に關し細密に歩砲の協定  
を爲す(十一日)天明聯隊長は先づ一砲臺小山砲一門を以て城内兩側又  
城壁の帽堡を直接照準に放し遂次破壊し敵兵の遮断して城門  
に近接し内部に兵に手榴彈を投する困難を以て其の一門  
を以て城門右側約五十米城壁の破壊射撃を實施し協力の加は爲彼  
壕位置を明示す其協定に基き飛行場内に在りし十加は俄然猛烈  
なる射撃を開始す彈着地は正確に城壁は遂次崩れ午前九時  
三十分及軍飛行機の爆撃と相俟ちて附近に敵を圧倒震駭す

1809

此の好機を利川一小銃合隊輕機二重機一と老華門内より城門上  
 に攀登り之を占領せし我爆薬砲臺中止すや敵は大擧ぎ遂龍表  
 し來り我彈藥倉を盡き果て白兵を振ひ突入す。も敵は手榴彈  
 を乱投し速巻ひに猛射す為に吾兵の大半は死傷加ふに手榴彈  
 を梯子は折れ後方續の寸後に流しぬ女門内に移る。  
 午後二時五分聯隊長は城門外第一大隊の残部を以て竹川集隊中  
 隊を編成一隊之隊長檜皮少佐に命じ、尚之を指揮せしを檜皮  
 少佐は直ちに第七隊十以一隊成中隊を増設し、且彈藥及糧食の  
 補給を計りたるは通路縱射し行かぬの旨倒れ不成功に終る城内の  
 將兵は困苦既之に耐へぬ力を盡し該地を確保す此の間清水部隊は主  
 力を以て防空を執り警備し且一部を以て夜間の中間の殘敵を掃蕩  
 す聯隊長を補佐し旅團との連絡に任しありし武田大尉は旅團長を命令  
 に基き午後四時歸還す翌十二日協力十加は更に破壊射撃を實施し  
 既属山砲又敵の工事を妨害し終に午後四時頃急斜坂突進路を  
 完全に開設す

1810 22

協力十五榴は此の間城壁内側の敵を猛射し強大なる偉力に依り敵を  
圧倒震駭す槍皮大隊は糧を失せず城門内を我兵に對し彈藥糧食の  
補給を敢行し終に成功す為に城門内を我兵の志氣大に振ふ午後五  
時三十分頃通溝門方向より敗殘兵約二百名城壁に沿ひ老軍門方向  
に移動するを發見し砲兵步兵が力を以て之を射集し多力擲擧  
を以て西方に潰走せしむ十二日夜半頃より敵の銃聲手榴彈の投  
擲漸次減少し十三日午前四時頃全くとすを以て竹川集隊中隊又  
槍皮大隊より直ちに午後五時頃城壁上に派遣せし所敵兵の大部既に退  
却せしを知り竹川集隊中隊は城門内を部隊と呼應し伊藤大隊長の  
遺骨を奉り城門「アーチ」右側の破壊斜面より槍皮大隊は第七中隊  
を先頭に右破壊斜面より一擧に城壁上に踏み上り兩側城壁上を掃  
蕩し該地を確保す午前五時聯隊長は軍旗を奉り城壁上に上り  
東の方皇居を遙かに拝し涙と共に萬歳し到着す旅團長に報  
告し旅團長は聯隊長の戦斗に關し旅團副官武田大尉として師團に  
報告せしむ

1811

敵地陸上陸以来奮戦又奮戦終に待望の首都一番乗りを遂げ燃然  
として我等の軍旗に輝けり一鳴呼神去りし一、一千二百六十五名  
の莫大の亦冥す

之を要するに本戦に於て敵國首都一番乗りを行ひ益々光輝ある  
軍旗に光彩を添え奉ると得たるは誠に感激に堪へざる所なり

伊藤大元帥陛下の御稜威の然らむる所にして又

朝香宮殿下も軍司令官に仰き奉り志氣益々揚り將兵一同  
軍旗の下に一致固く浮化鎮と於ける血戦三日の猛攻甚に引續き

萬難を排し敢て敢行し肉弾に續く肉弾を以て  
猛攻したる賜なり後日聯隊は感然と受領し又先頭を以て光

華門に突入せし山際少尉は宮殿下より長く其の佩刀を賜り  
此の間聯隊の損害は戦死少佐伊藤善吉以下三五七名負傷

大尉小川清以下五四六名なり

1812 北

第四 徐州附近の合戦

一 嘉定南翔附近の警備

昭和十二年十月十三日午載ニ青史ヲ飾ル敵首都南京城ヲ攻  
略セル聯隊ハ十月十四日次期作戰準備ヲ為南京ヲ出発シ長途ヲ行  
ハシ豫定ニ軍ヲ重不昭相十三日一月八日嘉定附近ニ集結シ嘉定南翔青鋪  
ニ至ル廣大ナル地域ニ警備ニ任シ戰後未タ日淺ク治安攪乱ニ匪團  
出沒絶エサル該地区ノ警備ニ治安確保ニ任シテ銳意戦力ヲ充  
實シテ計リ次期作戰ヲ準備ス

ニ 彼我態勢

四月下旬世界戦史比チキ徐州附近大殲滅戰ノ幕ハ切ワテ落サレタリ

第五戰区司令官本宗任ハ(十萬)大軍ヲ要枢徐州附近ニ集中シ日本

軍ト決戦ヲ進準備ス

之ヲ封シ我カ(支)方面軍ハ礮骨板垣、中島及村松兵團ヲ東方及北方

ヨリ徐州向ヒ進撃ヲ開始シ之ニ策應シテ包圍圈ヲ完成スヘク

(中)支(支)方面軍ハ先ヅ曹佳、蘇州浦東方面ヲ基幹トスル兵力ヲ鳳凰陽

1813 水





午前四時合協力爆撃隊ハ一斉爆撃ヲ開始ス黒煙天冲ニ大地為鳴動ス  
此ニ煙霧セル砲兵諸隊ハ突撃ヲ換射等々火蓋ヲ切テ八彈著極メテ正確ニテ  
爆煙飛陣ヲ覆ヒ壯絶極マリナシ

九第線ニ穿テ大隊ニ此自西ニ交通源ヲ利用シ又支烟中ヲ周圍前進シ  
逆軍中ナリカ午前十時十分砲兵集中射撃自取終彈ニ膚接ニテ敵突撃  
極烈ニ格斗後敵カ線ヲ奪取シ部落ニ突入致同ノ逆襲ヲ碎破シ家屋  
ニ燬ル頑敵ヲ掃蕩シテ逐次戦果ヲ擴張シ四時前七時五分胡口子北端  
ニ進發直ニ渡向自射ヲ以テ敵情地形ヲ偵察ス

北龍河ハ幅約四五百米水深二米至八十程ニシテ流速急ナラス

敵ハ河岸長後方部落線ニ線ニ舟相穿堅固ニ陣地ヲ点領シ我ヲ極射ス  
聯隊長ハ新ニ第一大隊ヲ九カ線トシ独立兵第一中隊及渡河材料中隊  
ト協力ニ胡口子西側第一大隊正面ニ主渡向ヲ又右第兵隊ヲ以テ梅野子北側  
ニ助渡向ヲ準備セシテ右四時五分ヲ以テ之ヲ決行シ命ス

正午ニ敵軍分能屬並協力砲兵、聯隊砲及步兵砲、直切ナル射撃ヲ以テ  
北岸ノ敵ヲ制圧セシ好機ニ乘リ第一中隊ヲ以テ敵然北龍河ヲ渡渡シ北岸

1815 37

敵陣地ニ突入引統ヲ散亂シ孤張シ午後五時終ニ張小郎ヲ據ル敵ヲ擊破シ同地ヲ占領ス

右第一線第二大隊、午後四時五分頃北淵向北岸、敵陣地ニ突寄支接射撃開始セルヤ予メ準備シヤリシ発煙班ヲ以テ煙幕ヲ構成シ午後四時五分分配屬突命隊、架橋機ヲ設ルニ既渡橋ヲ利用シテ其勢ニ從行渡向テ企圖セルニ敵大猛烈ヨリ遂ニ大半ハ胸ヲ受ル河中ニ躍リ勇敵ニ渡陸一帯ニ敵陣ニ突入シテ占領ス時ニ午後四時五分ナリ

大隊重ニ戦果ヲ擴張シ部落ニ掃リ須臾ニ抵接スル敵ヲ逐次擊破シ午後五時十五分鎮台子楊家樓袁巷子西北端一線ニ進歩ス

兩大隊被テ依然攻撃ヲ続行シ熾烈ニ敵大ヲ冒テ掘削ナルニ遂ニ聚テ擊破碎シテ逐次戦果ヲ擴張シ李邱子村岸無名部落、前邱子一線ニ

進歩ス

聯隊長冒被テ兩大隊由田張巷子ニ増加中ニ敵ヲ夜襲シテ遂ニ龍穴隊捕力ナシ敵大隊ヲ以テ強襲、都落内周章シ敵ヲ熾威シ午前三時十分終ニ張巷子北端ニ進歩ス之ヲ確保ス

1816

28

爾後聯隊、井出少將、隸下、復歸、決河、勢、以、北、龍、河、北、岸、數、數、  
線、陣、地、ヲ、倒、方、多、席、卷、シ、緒、戰、ニ、於、テ、多、大、志、戰、果、ヲ、収、ム、ト、夫、ニ、西、國、  
迅、速、ニ、線、陣、包、圍、完、成、ヲ、自、指、ス、北、進、作、戦、ヲ、極、テ、有、利、ナ、ラ、セ、タ、リ、  
此、間、至、ル、我、ノ、損、害、ハ、戦、死、吉、田、少、尉、以、下、〇、〇、名、及、負、傷、京、藤、中、尉、  
以、下、〇、〇、名、ナ、リ、

四雙橋集附近ノ戦斗

吾、早、朝、ヲ、聯、隊、北、龍、河、北、岸、數、線、陣、地、ヲ、創、建、シ、二、席、卷、シ、夕、刻、小、刈、  
庄、山、本、線、ニ、進、出、ス、夜、半、際、雨、降、然、ト、テ、未、リ、四、面、忍、ミ、テ、泥、海、ト、化、ス、  
右、日、聯、隊、泥、濤、彈、雨、ヲ、冒、シ、テ、猛、攻、劉、松、本、板、橋、ノ、敵、陣、ヲ、屠、リ、更、ニ、右、  
第、一、線、ヲ、步、兵、上、間、隙、ニ、増、加、中、ノ、敵、側、面、ヲ、攻、撃、シ、右、第、一、線、ヲ、攻、撃、  
ヲ、容、易、ナ、ラ、セ、ム、

自、早、朝、旅、団、ノ、九、才、一、線、ト、シ、テ、果、敢、戰、場、迄、移、リ、南、始、シ、午、前、七、時、楊、家、湖、  
達、シ、爾、後、縱、隊、進、撃、ニ、移、ル、翌、日、午、前、一、時、聯、隊、ハ、師、団、本、隊、ノ、先、頭、ニ、在、リ、  
前、進、中、張、庄、ニ、達、ス、當、時、  
當、時、師、団、ノ、前、衛、ト、シ、テ、步、兵、第、六、旅、団、主、力、(36、7、9、C)ハ、貴、庄、附、近、ヨ、リ、双、橋、集、附

1817 29

近ヲ至陳大郢附近ニ亘リ斜交陣地ヲ占領シテ砲約三門兵力約五百ノ敵ヲ  
攻撃中ニテ彼我ノ砲聲殷々ナリ

此時時ヨリ「歩兵第三十六聯隊」右翼隊トシテ吳家庄方向敵ヲ攻ル  
翼ヲ包圍スル如ク攻撃スヘシト要旨命令ヲ受領次テ「兵力約二十ノ敵  
小營集西方地区ヲ前衛ノ右翼方面ニ向ヒ南下中」ナル飛行機情報ヲ通  
報セル

報セル

聯隊長ハ直ニ第三第一大隊ヲ第一線トシ李家及趙庄北側ニ展開シ大張  
巷子及小張巷子ノ線向ヒ攻撃ヲ命ジ第二大隊ヲ予備隊トシ敵ノ北側首  
深ク包圍スル如ク前進ヲ部署ス

少大尉③  
二五七

午後三時頃郟庄北側ニ進出スルヤ敵兵約六百、小營集南側ヲ西進シ  
予備隊長ハ直ニ予備隊ノ機銃銃全カヲ以テ之ヲ極射、約二百ヲ斃シ  
テ北方ニ潰走セシメタリ

此時西南方ニ方リ銃砲聲旺ナリ第一線大隊ノ敵ト遭遇セシマシ而シテ聯隊  
主力ハ心ニ敵危側首ニ在リ、聯隊長ハ直ニ予備隊ヲ約九十度ノ北旋  
回ラサセタリ新ニ右第一線トシテ戦斗加入ヲ命ジ以テ双橋集附近陣地ヲ

1818 40

椽兵ニシテ小營集西側地ヲ攻勢ニ懸シ且約二十敵ヲ討シ劍背ヨリ官園  
殺刻ニシテ約六百ヲ斃シ鐵城ヲ打撃ヲ與ヘリ

此間縣隊損傷ハ戦死官内尉以下〇〇名右戦傷鈴木少佐以下〇〇名

戰死  
I  
鈴  
不  
少  
佐

名ナリ

五、追撃及轉進

聯隊ニ更ニ追撃ヲ續行シ九日板橋集東側地区ニ兵力ヲ集結シ爾後攻勢  
ヲ準備中十日第三大隊ヲ飛テ蕭集ニ據レル敵ヲ撃破セシム

十日追撃続行、十三日曾滑河北岸ノ敵陣地ヲ翼ヲ攻撃シ深ク敵側背ニ  
進出シ夜間機動ヲ以テ敢行シ十五日孫奸ニ進出シ且未明孫丹北側並  
瓦子口附近ニ於テ優勢ナル敵ノ抵抗ヲ排除北進シ同日蕭縣城東側  
地区ニ進出ス

十七日ヨリ十八日ニ亘リ敵方輕建椽兵トシテ死守セシ張二庄ノ堅陣ヲ突破シテ  
深ク敵側背ヲ迫リ蕭縣城ニ據ル敵ノ東方脱出ヲ防止ス

此間第三大隊ノ師團ノ右縱隊トシテ十六日ヨリ十七日ニ亘リ杉山黃山頭敵  
背後連絡線ノ要點ヲ夜襲ヲ占領シ全ク敵ノ退路ヲ遮断シ縣隊

1819 41

主力、敵東方脱出ヲ防止セシト、第六旅団ノ蒲縣城攻撃ヲ並ニ砲兵ノ  
協力ト相俟ケテ十八日二回三度リ敗走セシ敵退却部隊ヲ猛射シテ團  
長以下約三千ノ敵ヲ殲滅ス

次テ十九日糧食欠乏トテ熱中ヲ憚河附近ノ敵陣ヲ突破シテ二十日  
津浦線ヲ截其遮断殘敵ヲ掃蕩ス

爾後聯隊ノ師団本隊トシテ二十日朔里店ニ輾進シ沿道ノ殘敵ヲ  
掃蕩シテ前進次期作戰ニ備フル爲メ二十日蚌埠ニ集結更ニ列車  
輸送ヲ行リ常州附近ニ輾進シ該地附近ノ警備ニ任セリ

此間聯隊損傷ハ戰死十數少尉以下〇〇名員傷峯金少尉  
以下〇〇〇名ナリ

本會戰間存正聯隊ノ損傷ハ戰死宮内中尉以下〇〇名  
員傷鈴木少佐以下〇〇〇名ナリ

1820 ka

第五 武漢攻略戦

一 一般態勢

徐州會戦ニ敗レル敵ハ武漢防衛ヲ以テ最後ノ関頭ニ達セリトシ、ハ  
師ハ大軍ヲ動員シ之ヲ六ヶノ戦区ニ区分シ配置シ防戦之努力  
然シテ江南方面軍当面ノ敵ハ陳誠ヲ第九戦区司令長官トシ之カ防  
衛ニ當ラシメ兵力ニテ師ヲ配ス

之ニ対シ軍ハ六月初旬以來波田支隊ヲ以テ海軍ト協力シ揚子江  
ヲ溯江セシメ六月十日安慶ヲ占領シ爾後香口、彭澤ヲ抜キ六月四日  
夏湖口ヲ奪取ス

水中浮雲  
大木中尉

次テ七月五日姑塘北方地区ニ敵前上陸ヲ敢行シ翌二十四日桂浦部隊  
亦姑塘北側地区ニ海上陸決行七月十六日遂ニ九江ヲ占領ス

ニ集中並瑞昌西方地区ニ戦斗

師團ハ徐州戦終了ト共ニ蘇州、靖江、友常州、地区ニ駆進シ該地附近  
治安南面ニ任シ、次期作戦準備ニ邁進中八月三日出動ノ命ヲ受ケ  
漢常州附近警備ヲ第十七師團ト交代シ八月九日勇躍出發、途中

1821

2



鐵道並船舶輸送ヲ以テ二十一日九江ニ集結、爾后行軍ヲ以テ二十六日

西呂瑞昌東南端ニ進出、直ニ師團長直轄トシテ郎封山ニ先遣シ

アリ、第一大隊ヲ掌握シ又第二大隊ヲ以テ丁家鋪西方高池、步三五部

隊上交代シ當面ノ敵情地形ヲ偵察、爾後、攻撃ヲ準備ス

當面ノ敵、君山、周山、線ニ警戒陸地ヲ右領シ其主加陸地ハ馬鞍泉、磨山

一雲溪崖、線ニ在リ

二十日朝未解隊、第一、第三大隊ヲ第一線トシテ攻撃ヲ準備シ、元日、猛烈ニ攻

撃前進シ、一、二、三ニ敵警備陣地ヲ突破シ、二、三、日、君山、周山、線ニ進出シ

直ニ敵主陣地ニ對シテ攻撃ヲ準備ス

翌日、白拂曉解隊、重兵ヲ磨山ニ指向シ、既屬山砲兵大隊、直切ニ掩

護下ニ熾烈ニ敵火ヲ冒シ、猛攻ニ逐次天險ニ據ル、頑敵ヲ敵撃シテ

夕刻兩第一線ヲ以テ△△△高地中腹及揚家峯、線ニ進出ス

此時瑞昌、陽新道ヲ把守スル敵、峻峻ヲ利用シ防戦最モ努メ我隨探部隊

未だ攻撃ヲ開始セザル者取ルヤ續々兵力ヲ増加シ、乃至八師、砲約三十門

ヲ以テ愈々強ニ抵抗シ、猛火ヲ集中擲ル、遂ニ襲リ反覆、爲、聯隊第一

1822 26

線忽チ其毒死傷續去シ須臾ニテ其兵力大半ヲ失ウニ至リ

此函難ル狀況下ニ於テ聯隊長ハ毅然トシテ必勝ヲ確信シ勇猛沈著適切斷戰ヲ指導シ將兵又益志氣ヲ振起シ炎暑ノ下巧ニ薄暮夜間或ハ黎明等ヲ利用シ果敢ニ肉弾的攻撃ヲ反覆シ或ハ擲物ナル敵送殺ヲ破摧スル等堅忍不拔百斗ノ益シ一意任務達成ニ邁進シ九月四日ノ五五〇右第線第一大隊ヲ以テ磨山一帶ノ高地ヲ完全ニ右領シ六日〇三四五右第線第一大隊ヲ以テ嶮峻ナル雲漢崖中央高地ヲ右領シ敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘ更ニ不眠不休力戰奮斗、後七〇六〇中第一線第一大隊ヲ以テ重抗峯ヲ同ハシ。九第線第一大隊ヲ以テ金仙洞高地ヲ占領ス

此間好機ニ投シ第一大隊ヲ右第一線部隊トシ馬鞍泉ヲ急襲忽ニシテ之ヲ屠リ更ニ熾烈ナル追撃能集中射撃ヲ冒シ逆襲ヲ解破シ一六三〇栗衝出坡ヲ奪取ス

爾後聯隊ニ更ニ突兀シ梨頭尖嶺山老虎頭太陽塞等ヲ要衝ヲ登食攻略シ九月十四日旅団命令ヨリ周家附近ニ兵力ヲ集結ス

1823 45

翌十者ハハハ聯隊右翼隊等線部隊トシテ大屋辺ヲ出発、第一線部隊ハ  
 後方ヲ續行中、五ヨ新右翼隊右第一線ヲ命ジテ直チニ第三大隊ヲ右  
 上高地進シ、敵列附近敵陣地攻撃ヲ準備ス  
 又ハハハハハ帽峯高地ヨリハ熾烈ナル側射ヲ冒シ、猛烈攻撃前進シ、一季  
 二横列陣地ヲ突破シ、破竹、勢ヲ以テ戦果ヲ擴張シ、東辺老及阿前山  
 尖家腦及長森山等嶮岳岳空、敵陣地帯ヲ突破シ、二十日夜美女  
 峯一帶、高地ヲ完全ニ右領ス  
 翌三十日聯隊、新第三大隊ヲ新九第一線ニ増加シ、坡峯尖、攻撃ヲ命ス  
 兩第一線ハ力攻ニ仰天塹高地及坡峯尖中腹ヲ右領シ、更ニ攻撃ヲ續行シ、  
 首五ヨハ途ニ右第一線才天際ヲ以テ何家邑ヲ、第二隊ヲ以テ歩一九ト協力シ、  
 坡峯尖ヲ右領シ、引続キ横山、柯家山及北山、敵ヲ猛攻ス  
 葛野中尉、天際ヲ頼リ、頑強ニ抵抗ス、偵察ニ敵モ終ニ夜半後退却、止ムナキニ至リ、聯  
 隊、直ニ兩大隊ヲ以テ果敢ニ戰場進撃ヲ敢行、隘路ニ殘敵ヲ擊破シ、  
 下川中尉、一季ニ北山、柯家山及横山ヲ右領、三ヨ、柵村保、玉原、線ニ進出、完全ニ任務  
 ヲ達成セリ。

1824 46

本戰間於ル聯隊ノ損害 戦死杉山中尉以下  
少佐以下  
名アリ

六、富永ニ向テ進撃及富永附近ノ戦斗

九月十五日朝聯隊主力ハ第一大隊ハ右進撃隊本隊トナリ  
桃村保ヲ  
出発富永ニ向テ進撃ヲ開始ス

八時頃木石港附近前進中師団命令ニ依リ第三大隊ヲ基幹トスル部隊ヲ新ニ  
師団直轄トシテ王子南方ヨリ九進撃隊正面ノ敵ヲ側背ニ突進セシメ主力  
尚戦況進展ニ伴ヒ逐次集結地ヲ推進ス

十且是午上野均丸ニ於テ王子崗南方地区ヨリ歸還セル第三大隊隊長  
榎更ニ猛進ニ旨師団命令ニヨリ一五〇第六大隊ヨリテ河津村ニ搜索  
據点ヲ占領セシメ當面ノ敵情地形ヲ偵察セルト共ニ同時聯隊主力ヲ  
落渡袁石井明石橋塘張地区ニ集結シ一意富水ノ渡河攻撃ヲ準備ス  
九月九時聯隊ハ右翼隊第一線トナリ第一大隊ヲ第一線ニ富水ヲ  
渡河野戦重砲兵第十四聯隊ノ適切ニ掩護射撃ノ下ニ中約三料深  
股邊セル沼澤地域ヲ放膽シ敵前渡渉ヲ敢行狼狽セル敵ノ不意ハ

1825 47

虚隙ニ乘シテ拳ニ敵岸ニ垂衝老若虎谷ニ去中立ニ帯高地線ヲ占領  
軍主力ヲ渡河並爾后攻撃進展ヲ容易ナラセリ

聯隊長ハ直チニ第三大隊ヲ新ニ右第一線ニ増加シテ戦果ノ振盪  
策以當時聯隊ニ其戦力半減シヤリシモ克ク師団攻撃ノ重責ニ  
面ヲ担任シ橋高五乃至六百ノ天険ニ據リ頑張ナル抵抗ヲ持續スル  
約八ヶ師ノ敵ニ対シテ昼夜間斷ナキ猛攻ヲ加ヘ死傷続出加フルニ秋雨、  
寒冷ヲ貫元中、補給極ニ困難ナル状況下ニ於テ將兵ニ毅團結意  
難ク克服シテ力戦奮斗以テ敵主陸地帯ヲ率先楔入突破シ而テ  
隣接諸隊攻撃ヲ容易ナラシメ遂ニ十月十五日一五四五石岩嶺音  
山等敵嶺最右橋矣ヲ席卷以テ敵ヲシテ余ヲ富永西方高地帯  
抵抗ヲ余皆断念セシムルニ至レリ

此間聯隊ノ損害ハ戦死酒井中尉以下〇〇名 戦傷三浦中尉  
以下〇〇名ナリ

1826 KA

三河漢鐵路ニ向フ追撃

十月二十日ヨリ三河聯隊主力ヲ第九師團先遣隊本隊トシ、饒家ヲ出發途中、  
歐家灣ニ於テ新先遣隊前衛トシ、金牛西方地区ニ向ヒテ突進シ、二十三日  
正午頃前兵ヲ第一大隊先頭ヲ以テ、余金牛附近ニ達スル<sup>俄然</sup>揚橋附近ニ障  
地ヲ占領セル敵猛射ヲ受リ

聯隊長ハ全般狀勢ニ鑑ミ前衛独力攻撃ヲ決意シ前兵ヲ第一大隊  
ヲ第一線トシ新先遣隊ヲ右第一線トシ展開シ、五ノ攻撃前進ヲ命ジ、  
爾後聯隊ニ適切ニ戰鬥指導トシ第一線大隊ノ勇戰ニヨリ遺憾ナリ其戰力  
カヲ綜合發揮シ溢路兩側峻嶽ニ據ル頑敵ヲ席卷シ、鉄門坡高地及龍  
饒家港南側高地一帯ヲ占領ス

翌二十四日九ノ聯隊ハ敵ヲカ山地方ニ牽制サレタル好機ニ乘リ新先遣隊  
ニ復歸セル第一大隊主力ヲ中第一線トシ疾風迅雷本道ニ沿フ地区ヲ突進シ  
セテ三ノ揚橋ヲ占領ス

敵兵力ヲ増加シ約四ノ師ハ揚橋附近溢路口ヲ確保シ、武漢方面敵主  
力ヲ退路ヲ掩護シ企圖シ金牛方面ヨリス長射程砲並歩兵重火器猛射

49

1827

下ノ拠点ナル迄 敵ヲ反覆シテ爲ニ聯隊ノ死傷續出 攻撃終兵力僅ニ  
數百ノ少キ至ルモ 將兵一同 敵殲滅ノ決意ニ燃エ 適切ナル歩砲飛協同  
ヲ斷行トシテ 昼夜間此ヲ猛攻スルニ終ニ要衝雷打山ニ角出ヲ奪取  
シ 敵企圖ヲ破砕シ 其増援隊ト夫ニ遠ク西方ニ潰走セシメ 完全其  
任務ヲ達成セリ

此間ニ於ル聯隊ノ損害 戦死 安保大尉以下〇〇名 負傷 壁下少尉以  
下〇〇名ナリ

#### 四 岳州方面ノ追撃

十月十八日聯隊ノ右追撃隊ト本隊トテ 粵漢線ヲ横断シ 黄石橋  
六ノ川着ニ着後 同地附近ニ兵力ヲ集結シ 銳意南下作戰ヲ準備ス  
當時武漢方面防衛ニ敗レタル敵兵團ハ 大部分ハ平江方面ニ退避シ  
整程中ナルモ 如ク其兵力ハ平江週辺ニ約十四師 崇陽附近ニ約三師  
高橋附近ニ東洋潭鋪附近ニ一山嶽地帯ニ約十師ヲ配シ 敗余殘  
兵ヲ以テ 咸寧ヲ以西各地区ニ若干ノ陸地ヲ占領シ 我カ南下作戰邀撃ヲ策ス  
十月廿日 敵主力ハ岳州ニ向ヒ 長驅進撃ヲ開始ス 聯隊主力ハ其本隊

50

1828

上り追撃す途中九日第三大隊主力ヲ以テ羊樓崗ノ敵ヲ攻撃セリ該地ヲ  
 占領師團ノ九側背ヲ安んず直ニ騎兵ト交代追撃ヲ續行中  
 十日山下嶺師團命令ニ基キ王家灣附近ニ聯隊主力ヲ集結、新鈴  
 木支隊ヲ併セ指揮シ第九師團中央追撃隊上り青石河沖附近溢路  
 口ヲ占領セル敵ヲ擊破シ嶮峻ナル山道ヲ踏破シ累加セル疲勞下餓  
 隊トイテ克服シテ急進、十一日一七〇〇岳州ニ進出、翌十三日更ニ右追撃  
 隊上り隨所ニ殘敵ヲ掃蕩シテ、新南塘ニ向テ敵ヲ急進、日没師團命  
 命ニテ新南塘ニ古方金間ニ兵力ヲ集結ス  
 此間聯隊ノ損害、戦死福島中尉以下〇〇名、戦傷脇本少尉以下  
 〇〇名ナリ  
 武漢政略間、聯隊ノ損害、戦死安保大尉以下〇〇名、戦傷槍  
 皮少佐以下〇〇〇名ナリ

1829



第六 寧漢線方面の警備

一 警備

武漢以略引統ヲ断行セル岳州追撃ヲ多大ノ成果ヲ収メ我カ師団ハ咸  
寧以西寧漢鐵路沿フ地区ニ警備ニ任ス

聯隊ハ西寧漢地区ニ尤地区ニ警備隊トシ本部ヲ長安駟馬道ニ置キ北方  
臨湘、白雲磯ヲ南ニ桃林ヲ新塹河北岸ニ置シ廣大ナル地域、  
警備ヲ担任シ十月二十日前後夫々配置ニ就ク

爾来寡兵克リ残敵ヲ討滅シ治安ヲ維持復シ難民宣撫ニ東奔西  
走其勞苦亦極メテ大ニモノリ就中、昭和四年三月下旬、計約如山林  
ノ大討伐、吾上同忠防附近ノ戦斗ノ如キ蓋シ特筆スヘキモノト謂フ

ハ

ニ新塹河以北大雲山附近ノ戦斗

南昌攻略ヲ引續キ西進志第ニ師団、蒲圻以南進発ヲ機上師団ハ  
作戰地域内、残敵ヲ討滅スル共ニ新塹河北岸高地線ヲ討スル奇襲  
的攻撃ヲ企圖スル聯隊ハ吾上旨以右行動開始先ハ白湖假劉周烈

1830 52

附近兵力ヲ集結シテ攻撃ヲ準備ス

敵新墻河南岸既設陣地ヲ奪取スルニ同地北岸油港沿岸地ニ高

地帯ニ警備トシ陣地ヲ構築中ニシテ其兵力約千師ナリ

五月十日聯隊師團ノ右方線重突山面ヲ担任スルコトナリ

第三大隊ヲ一線トシテ油港右岸高地線ニ展開シ十九時半ヲ期シ

一奇ニ油港ヲ渡河奇襲的ニ漆原埠東方高地線敵ヲ撃破引続

キ右方天防正面ニ重突ヲ指向シテ突進ニ上日午既ニ草鞋火々

南地既設陣地ヲ撃破シ三日亦天防ヲ速ク右側ヲ叩崩

附近敵ノ退路ヲ遮断セシムヘク前進ヲ命ジ二十四日早朝敵重要橋

莫ク甘田ニ突入シ大雲山方山洞白羊田附近ノ敵退路ヲ遮断シ新墻

河北岸ノ敵ヲ森林茂密の打撃ヲ受ヘリ(五月十日以後青木松岡長

兼指揮ス) 日本隊中間ノ損害戦死川村少尉以下〇名負傷壁下少尉以

三岳州附近ニ陣

次ヲ聯隊ノ新警備地域ニ移リ漆原埠小橋辺康王橋附近ニ兵力ヲ

配置シテ警備ニ任シテ兵力第六師團ノ該地区進出ニ伴ヒ警備ヲ交

59

1831

佐々木兵州附近に逐次兵力を集結

第七 歸還

六月十日以降聯隊本部以下諸隊、逐次兵州より東船揚子以下江  
津津車載、歸り便に無限の感慨を抱き、六月十日、吳淞中、  
離れ、百以島沖投錨、百曾、宇品上陸、直利、東輸送、ヨリ、宇音  
歸江、臥、刺、華、著、邦、党、萬、才、秋、呼、迎、工、  
軍旗、二、年、振、リ、三、水、堂、に、歸、ル  
爾來諸隊、亦悉、海、音、を、最、後、に、手、歸、還、復、員、諸、業、務、因、情、進、展  
レテ、百、十、日、復、員、を、完、結、ス、陸、軍、を、一、新、シ、テ、次、期、作、戦、に、備、ス、遺、進、ス  
此、間、七、日、日、記、念、日、ヲ、ト、シ、故、伊、藤、善、光、中、佐、以、下、戦、病、歿、者、勇、力、子、合  
同、慰、靈、祭、ヲ、執、行、シ、テ、莫、靈、ヲ、慰、安、ス、且、テ、其、遺、業、ヲ、継、承、シ、テ、要、戦、島、  
ノ、員、遂、ニ、一、層、ノ、奮、勵、ヲ、指、言、ス

以上

1832